夏季・冬季パラリンピック競技大会の新聞写真報道分析

矢島佳子　藤田紀昭

はじめに

日本国内におけるパラリンピックの新聞報道は長野大会（1998）を契機に大きく増加し，その後はパラリンピックイヤーの度にその報道件数が上昇する傾向が続いてきた[1]。2013年に東京2020パラリンピック競技大会（以下「東京大会」と略す）の開催が決定して以降，その件数はますます増加しているにもかかわらず[2]，国内におけるパラリンピック関連の新聞報道調査研究の数は限られており，特に新聞写真に関しては，藤田（2002）によるアトランタ（1996）・長野（1998）・シドニー（2000）・ソルトレークシティ（2002）の夏季・冬季パラリンピック大会の調査以外はほとんどないのが現状である[3]。そのため，本稿では，日本におけるパラスポーツ報道の変化を知る手がかりのひとつとして，1996年から2018年に開催された夏季６大会，冬季６大会のパラリンピック新聞写真が映しだす内容を経年比較し，その報道にどのような変化があったのかを明らかにする。

Ⅰ．先行研究の検討

パラリンピックに関連した新聞写真調査研究は，国内においては藤田（2002）が，朝日新聞・毎日新聞・読売新聞・中日新聞におけるアトランタ（1996）・長野（1998）・シドニー（2000）・ソルトレークシティ（2002）の４大会の新聞写真651件を対象に，「掲載面」，被写体の「性別」「国籍」「障がい種」「競技」「表情」「場面」「障がいの有無」「障がい表象の種類」に関する項目を立て分析している。藤田によれば，その結果は「より速く，より高く，より強く」という健常者スポーツの支配的価値の基準を満たす人を価値があるとする傾向を強化するものだった。そのため，藤田はこの価値を基準とし追い求める限りは，障がい者は社会において常に「健常者」にはなれない「障がい者」として評価，分離（排除）されてしまう危険性があると指摘した[4]。

海外では，Schantz & Gilbert（2001）が，新聞報道調査の一環として，フランス４紙・ドイツ４紙の政治・経済記事の比重が高い高級紙におけるアトランタ大会に関する新聞写真（25件）について，「新聞別掲載数」「性別」「構図（全身・上半身・顔）」「障がい種」を分析した[5]。Schantz & Gilbert は，約３割の写真において障がい表象が隠されている一方，半数以上の写真では車椅子アスリートが掲載されており，多くのメディアは，障がい者と障がい者アスリートが車椅子と結び付けられステレオタイプ化されることには抵抗がないようだとした。また，約半数の写真で，顔もしくは上半身のみが写し出されており，主に全身が写る競技中の構図が一般的なスポーツ報道写真とは異なる点を指摘した。Buysse & Borcherding（2010）は，中国・南アフリカ・ニュージーランド・イタリア・米国の計11紙における北京大会（2008）に関する新聞写真（152件）の「新聞別掲載数」「性別」「場面（ユニフォーム着用の有無，競技場にいるか否か，競技中か否か）」「写真のテーマ（競技性・障がい・共感・勝利など）」「掲載面」「競技」「障がいの表象有無／障がい表象の種類」の各項目について，ジェンダーと障がい種に着目して分析した[6]。その結果は，DePauw（1997）らによる指摘，すなわち近代スポーツは三つの特徴「男性らしさ（Masculinity）」「身体性（Physicality）」「セクシュアリティ」から構成されており，それらに当てはまらないものを周縁化しているという理論を支持するものだったと結論づけた[7]。Pappous Marcellini & Léséleuc（2011）は，フランス・ドイツ・英国・ギリシャ・スペインの10紙におけるシドニー大会・アテネ大会（2004）・北京大会の新聞写真（292件）を対象として，「国別掲載数」「競技中の写真（action shot）の割合」「障がい表象のない写真の割合」「国旗を持つ選手の割合」「笑顔の選手の割合」などについてシドニー大会と北京大会を中心に比較している。Pappous et al. は，写真掲載数はシドニー大会と北京大会を比較すると全体的には増加した一方，その多くの写真においてアスリートは活動的（athlete in action）ではなく，動きのない姿（motionless）であり，競争力やパラアスリート（注１）の能力は注目されていなかったと考察した[8]。Hilgemberg（2016）は，ブラジル４紙におけるロンドン大会（2012）の新聞写真（86件）を対象に，「新聞別掲載数」「性別」「構図（全身・上半身・膝より上・顔のみ）」「障がい表象の有無」「障がい表象の種類」を特に男女間の差に着目し分析した。その中で Hilgemberg は，主な被写体は，身体障がい（切断・車椅子・視覚障がい）のある男性選手であり，その障がい表象は隠されていなかったとした。男性選手の掲載率は女性選手のそれを圧倒的に上回っているが，写真の構図に関しては，男女共に約４割以上が全身を写し，６割以上で障がい表象が確認できる類似したパターンであったと報告した[9]。

こうした先行研究を概観したところ，パラリンピック関連の新聞写真について複数の

大会を経年比較した研究が非常に少ないこと，また，藤田（2002）を除いて冬季大会を取り上げている先行研究はほぼないことがわかった。そのため，本稿では，国内の新聞２紙に限定するものの，1996年から2018年に開催されたアトランタ・シドニー・アテネ・北京・ロンドン・リオ（2016）の夏季６大会，長野・ソルトレークシティ・トリノ（2006）・バンクーバー（2010）・ソチ（2014）・平昌（2018）の冬季６大会のパラリンピック新聞写真が伝えた内容を経年比較した上，分析を試みる。調査に当たり，本章の冒頭で触れた藤田（2002）との正確な比較を可能とするために，1996年から2006年までの夏季３大会，冬季３大会の調査データについては藤田が作成したデータを使用する。それ以降の2008年から2018年までの６大会に関する新規入力データは藤田（2002）の調査項目に則って作成する。

Ⅱ．調査方法

(1)　調査対象

1996年から2018年までに開催されたパラリンピック夏季６大会，冬季６大会の大会期間中の朝日新聞・読売新聞の朝刊・夕刊を対象に実施する。両紙を選択した主な理由としては，全国版朝刊販売部数１位（読売新聞，約800万部）と２位（朝日新聞，約558万部）であること[10]，新たにデータ入力が必要とされた2008年以降の大会記事が載る紙面が前述２紙のデータベースを用いて閲覧可能だったことが挙げられる。なお，1996年から2006年のデータは藤田（2002）による調査結果とその追加調査の結果（藤田が対象とした４紙のうち，朝日新聞・読売新聞の調査結果のみ）をそのまま引き継ぐ。

2008年以前の大会については，新聞紙面から「パラリンピック」関連の記事を探し該当記事を抽出した。2008年以降の大会は，新聞社のデータベース（聞蔵Ⅱビジュアル・ヨミダス歴史館）を利用し，「パラ」または「パラリンピック」のキーワードで該当記事を抽出する。なお，該当する大会以外の大会（例　東京大会）に関する記事・テレビ欄・ラジオ欄・読者投稿欄・広告欄・書評欄は調査対象から除外する。

(2)　分析項目

以下に挙げる①～⑪の項目を，藤田（2002）に依拠して分類する。なお，③～⑪では，②被写体の種類で「選手」に該当した写真のみを調査の対象とする。

①　写真掲載数

「パラ」または「パラリンピック」のキーワードで抽出された記事に掲載される

写真の数。１件の記事に複数の写真が掲載されていた場合は，その合計数。

② 被写体

「選手」「選手以外（開会式会場，用具，アスリートを支える人など）」に分類。本調査では，１件に複数の被写体が写っている写真も対象とする（注２）。ただし，複数の選手が写っている場合は，カメラマンが焦点を合わせている選手を分析対象とする（焦点が合わずに背景となっている選手は対象から除外）。また，ガイドランナーやボッチャの介助者などが選手と共に写っている場合は，「選手」を選択する。なお，開閉会式時など，会場や競技場などの人物以外がテーマとなっている写真の一部として選手が写っている場合は，「選手以外」とする。

③ 朝刊・夕刊

「朝刊」「夕刊」に分類。

④ 掲載面

「一面」「スポーツ面」「社会面」「特集面」「その他」に分類。

⑤ 性別

「男」「女」「両方」に分類。

⑥ 国籍

「日本人」「外国人」「両方」に分類。

⑦ 競技

各大会の実施競技（「陸上競技」「水泳」など），それ以外の競技は「その他」に分類。

⑧ 場面

「競技中」「競技中以外（開閉会式・表彰式・試合直後など）」に分類。なお，大会期間中以外に撮影された写真（過去の大会時の「競技中」の写真，過去の家族写真など）も含む。

⑨ 表情

「真剣」「笑顔・歓喜」「嘆き」「無表情（選手紹介やメダリスト一覧などで使われる選手の顔写真を含む）」「特定できないもの（顔が小さすぎて表情が認識できない，アイシェードやゴーグルに顔が覆われて表情が認識できないなど）」。なお，表情判定が困難な写真については複数人（３人）で判定した。

⑩ 障がい表象の有無

「障がい表象有」「障がい表象無」に分類。

⑪ 障がい表象の種類

夏季・冬季大会別に以下の通り分類。

【夏季】「車椅子」「障がい部位」「義手・義足」「ガイド・パイロット」「ゴーグル・アイシェード」「自転車（三輪・ハンドサイクル）」「その他」。

【冬季】「車椅子」「障がい部位」「義手・義足」「ガイド」「スレッジ」「チェアスキー」「シットスキー」「その他」。

(3)　データ処理

Microsoft 社の excel2016を使用する。

Ⅲ．調査結果

本章では，前述した①～⑪の項目に従い，夏季・冬季それぞれ６大会の経年変化をグラフで示し，その内容を概観し考察する。なお，グラフの構成比は小数点以下第２位を四捨五入しているため，合計しても必ずしも100％とはならない場合がある。

①　写真掲載数

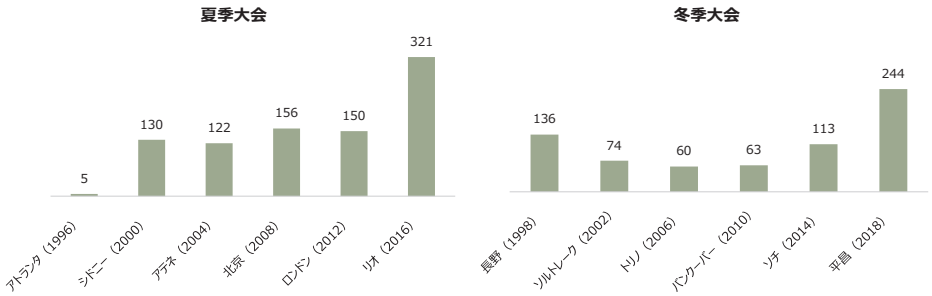

図１　写真掲載数

まず，夏季・冬季別の写真掲載数の合計を比較する。夏季884件，冬季690件で夏季の方が200件弱多い。夏季・冬季各６大会の開催期間・競技数・日本人選手参加者数の平均をみていくと，開催期間は夏季が10日間，冬季は９日間，競技数は夏季が20競技，冬季は５競技，日本人選手の参加者数は，夏季が137人，冬季は40人である。開催期間にはあまり違いはないものの，競技数と選手の参加者数に見られる夏季と冬季の差を考慮すれば，掲載数の差も必然的な結果であると考えられる。

次に経年変化をみると，夏季は，アトランタ時は掲載数が５件と著しく少なかったが，次大会であるシドニーでは130件まで急増する。その後，アテネ122件，北京156件，ロンドン150件と大会ごとに増減が繰り返され，リオでは前大会であるロンドンの150件の２倍以上に当たる321件にまで跳ね上がる。

冬季は，自国開催の長野では136件あるが，次の大会のソルトレークシティでは74件とほぼ半減し，トリノ60件，バンクーバー63件とさらに数を減らしている。しかしながら，ソチでは長野までとはいかないものの113件まで増加し，平昌ではその倍以上の244件となっている。

掲載数が増減するタイミングに着目すると，背景のひとつに「自国開催」というキーワードがあることが読み取れる。アトランタでは５件しか掲載されていない写真が，その２年後，日本初となった冬季パラリンピック大会の長野では136件になり，その２年後のシドニーでも130件と同水準を保っている。その後2013年に東京大会の開催が決定すると，2012年のロンドンでは150件だったものが次の夏季大会であるリオでは321件になる。また，冬季に着目すると，2010年のバンクーバーでは63件だったものが，４年後のソチでは113件，そして８年後の平昌では244件となり，夏季・冬季ともに大会を重ねるごとにほぼ倍増している。特に2016年以降の急増については，今回調査対象に選択した朝日新聞と読売新聞が，同年１月以降，東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のオフィシャルパートナーとなったことが要因として働いたことも考えられる[11]。Moscovici（2011）によると，開催国のメディアには，（未来の）観客に対し「未知なるもの（障がい）」を「親しみのあるもの」に変え，ひいては集客につなげる役割があり[12]，この２紙にはオフィシャルパートナーとしてまさにその役割が課されていることから，掲載数の急増は当然の結果であるとも言える。

②　被写体

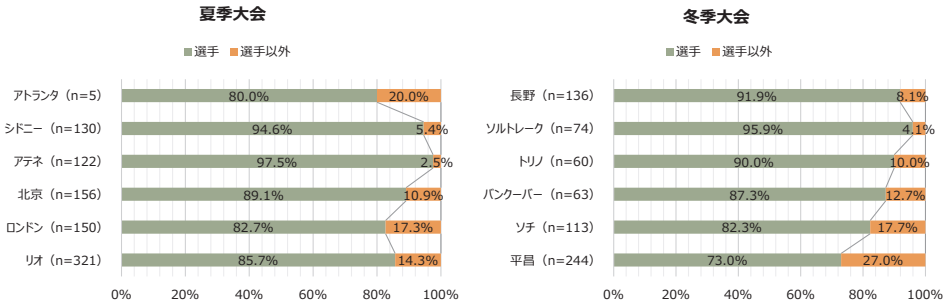

図２　被写体

冬季の平昌を除き，夏季・冬季のすべての大会において被写体が「選手」である割合は80％を超えており，主に「選手」に焦点が当てられていることがわかった。

「選手以外」の被写体には，開会式会場，用具，アスリートを支える人（選手の家族，関連団体関係者，技術者，コーチ等）など，主にアスリートをとりまく環境や人がある。その割合をみると，夏季はアトランタ（20.0％）からアテネ（2.5％）の間は減少傾向に

あったが，その後北京からゆるやかな増加傾向に転じ，直近のリオでは14.3％になる。夏季の「選手以外」を掲載数でみると，北京では17件，ロンドンは26件だったところ，リオでは46件まで増えている。

一方，冬季の「選手以外」はソルトレークシティで最低値4.1％を示した後，大会ごとに一貫して増加し，直近の平昌ではソルトレークシティのおよそ6.5倍の27.0％になる。冬季の「選手以外」の掲載数も，トリノ６件，バンクーバー８件，ソチ20件，平昌66件と大会ごとに増えており，「選手以外」の被写体であるアスリートを取り巻く環境や人について伝える記事の掲載数は夏季・冬季共に近年増加傾向にある。

増加傾向にあるサポートをする人の写真を詳しくみていく。近年の夏季３大会・冬季３大会では，パラアスリートを支える人に関する写真付き記事を48件確認した。最も多い被写体は，選手の家族で14件，次いで，日本パラリンピック委員会をはじめとした関連団体などの関係者11件，義肢装具士４件，技術者４件，コーチ４件，監督３件と続いている。こうした被写体の増加は，社会において，パラリンピックに対する関心が広がっていることや，パラアスリートが問題なく活躍できるよう環境づくりを支える人たちの重要性が理解され始めていることを示唆している。

③　朝刊・夕刊

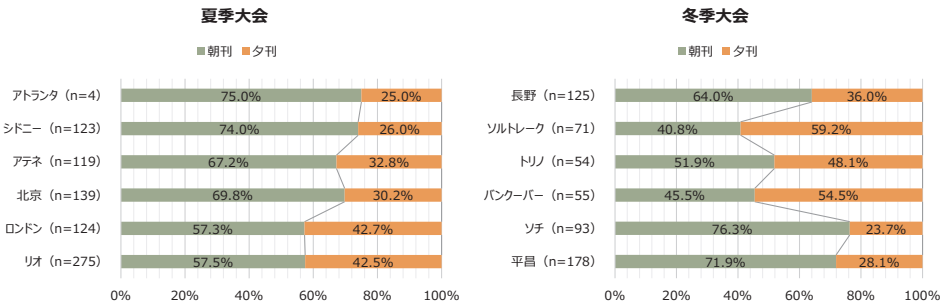

図３　朝刊・夕刊

冬季のソルトレークシティ・バンクーバーを除いた夏季・冬季すべての大会で朝刊の掲載率が50％を超えている。夏季については，アトランタから北京では，７割前後で朝刊に掲載されているが，直近２大会ではおよそ朝刊と夕刊は６対４の割合で推移している。

冬季は，長野では64.0％あった朝刊の割合が，その後ソルトレークシティでは40.8％に減少し，トリノとバンクーバーでは朝刊・夕刊の割合がおよそ半々となっている。その後ソチでは朝刊と夕刊がおよそ８対２の割合となり，直近の平昌ではその比率が７対３に変わる。

新聞通信調査会が実施した2010年の第２回「メディアに関する全国世論調査」では，朝刊を読んでいる人の割合は84.0％だったのに対し，夕刊を読む人の割合は33.6％だったことが報告されている[13]。夕刊よりも朝刊を読む人が多いということは，朝刊に掲載される記事のニュースバリューが夕刊のそれに比べて高い傾向にあるとの見方もできる。そこで，2013年９月に東京大会開催決定後に開かれた冬季のソチ（2014）とその前大会のバンクーバー（2010）の間で朝刊と夕刊の掲載数にどのような変化があったのかをみてみる。バンクーバーでは朝刊25件，夕刊30件だったところ，ソチでは71件と22件となっている。その増減率をみると，朝刊は184％，夕刊は―27％と大きく異なり，東京大会の開催決定を契機にして，パラリンピックのニュースバリューが高まり，朝刊に掲載される件数が増えたことを窺わせる結果となった。

ただし，パラリンピックの大会は世界中で開催されるため，ニュースバリュー以上に，開催都市と日本との時差が朝刊と夕刊の比率に影響を与えているとも考えられる。一般に朝刊の記事は21時～25時，夕刊は11時～13時の間に締め切りが来るとされている[14]。仮に，そうした新聞製作の過程に時差が影響しているとすれば，日本とは－12時間の時差（リオデジャネイロ州標準時間）のあるリオで９時（日本時間，同日21時）に開かれた試合は日本の朝刊に掲載され，17時の試合（日本時間，翌日５時）は夕刊に掲載されることになる。実際のリオのボッチャと車いすラグビー日本代表の試合を例に取り上げてみる（表１，表２）。2016年９月12日19時30分（日本時間，翌13日７時30分）からはじまったボッチャ混合団体の決勝戦の結果は，翌13日の夕刊で主に伝えられている。また，車いすラグビーの３位決定戦は，９月18日９時（日本時間，同日21時）に開始されたが，翌19日の朝刊のみで報道されている。このボッチャと車いすラグビーの例をみる限り，時差は朝刊と夕刊の割合に影響を与えていると考えられる。

表１　リオ大会のボッチャ日本代表（混合団体）の準決勝・決勝の写真付き掲載記事一覧

試合	試合日	現地時間	日本時間	新聞名	掲載日時	朝刊／夕刊	見出し
準決勝	９月11日	17:00	５：00（翌12日）	朝日	９月12日	夕刊	ボッチャ銀以上，初メダル
				読売	９月12日	夕刊	天国の父へ　メダル贈る　ボッチャ
				読売	９月12日	夕刊	ボッチャ　技の日本　全開
				読売	９月12日	夕刊	ボッチャ　日本「銀」以上
				朝日	９月13日	朝刊	正確な投球光る 「金とって競技広めたい」 ボッチャ
				読売	９月13日	朝刊	ボッチャ　広瀬巧投　決勝４点 「銀」以上
決勝戦	９月12日	19：30	７：30（翌13日）	朝日	９月13日	夕刊	日本，メダルラッシュ　ボッチャ・競泳・陸上
				朝日	９月13日	夕刊	磨いた一投，次こそは頂へ 「ボチトレ」筋力鍛え世界に対抗
				読売	９月13日	夕刊	ライバル　高め合い　ボッチャ「銀」
				読売	９月13日	夕刊	日本攻め抜き「銀」 東京へ「大きな一歩」
				読売	９月13日	夕刊	ボッチャ「銀」
				朝日	９月14日	朝刊	銀，東京に向け自信　ボッチャ
				読売	９月14日	朝刊	ボッチャ　初の「銀」 普及後押し

国際パラリンピック委員会（IPC）の公式ページと開蔵Ⅱビジュアル・ヨミダス歴史館のデータを基に筆者作成.

表２　リオ大会の車いすラグビー日本代表の３位決定戦の写真付き掲載記事一覧

試合	試合日	現地時間	日本時間	新聞名	掲載日時	朝刊／夕刊	見出し
３位決定戦	９月18日	9:00	21:00（18日）	朝日	９月19日	朝刊	悲願の銅，裏方が立役者　車いすラグビー
				朝日	９月19日	朝刊	亡き友へ，恩返しの銅 車いすラグビー主将・池透暢
				読売	９月19日	朝刊	車いすラグビー日本　新たな歴史
				読売	９月19日	朝刊	車いすラグビー「銅」

IPC の公式ページと開蔵Ⅱビジュアル・ヨミダス歴史館のデータを基に筆者作成.

次に，全12大会を地域別に分けて朝刊と夕刊の比率を比較する（表３）。日本との時差が比較的少ないアジア・オセアニアとヨーロッパ地域においては朝刊の割合が高く，時差の開きがより大きい南北米地域では夕刊の割合が高い傾向が読み取れる。以上を総合すると，時差は朝刊と夕刊の割合に一定程度影響を与えている可能性が示唆される。

表３　開催都市と日本との時差（大会開催時）と写真付き記事の朝刊・夕刊の掲載率（朝日新聞・読売新聞）

開催都市（日本との時差）	朝刊	夕刊	開催都市（日本との時差）	朝刊	夕刊
アジア・オセアニア			ヨーロッパ		
シドニー（＋２）	74.0%	26.0%	アテネ（－６）	67.2%	32.8%
北京（－１）	69.8%	30.2%	ロンドン（－８）	57.3%	42.7%
長野（±０）	64.0%	36.0%	トリノ（－８）	51.9%	48.1%
平昌（±０）	71.9%	28.1%	ソチ（－５）	76.3%	23.7%
北米			南米		
アトランタ（－13）	75.0%	25.0%	リオ（－12）	57.5%	42.5%
ソルトレーク（－16）	40.8%	59.2%			
バンクーバー（－15・－16）	45.5%	54.5%			

④　掲載面

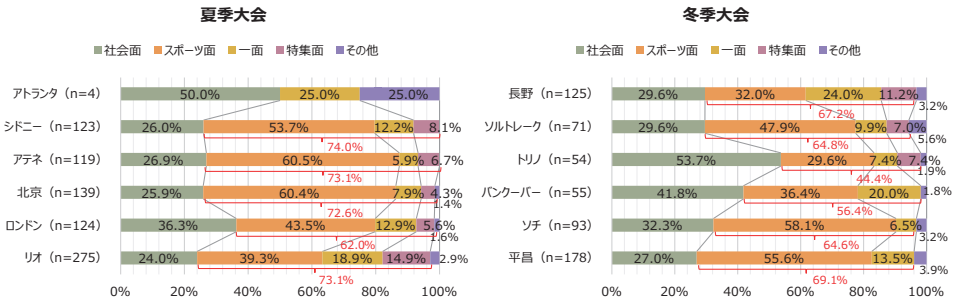

図４　掲載面

掲載面については，夏季・冬季共に，パラアスリートの写真は主に「スポーツ面」もしくは「社会面」に掲載されていることがわかる。

夏季の「スポーツ面」の割合は，アトランタでは記事が皆無だったところから，シドニーで53.7％に急増し，アテネで最高値の60.5％を示して以降，徐々に減少し直近のリオでは39.3％になる。「社会面」の割合は，シドニーから北京まではおよそ26％から27％の間を推移し大きな変化はなく，ロンドンでは36.3％に増えるが，直近のリオでは６大会中一番低い24.0％になっている。夏季では「スポーツ面」がアテネ以降減少した一方，「一面」の割合は，アテネで最低値の5.9％を示した後増加を続け，リオではその３倍以上の18.9％となる。また，「特集面」の割合も近年は，北京時の4.3％からリオの14.9％へと3.5倍近く増加している。

冬季の「スポーツ面」の割合は，長野の32.0％からソルトレークシティでは47.9％と増加するが，トリノでは29.6％まで減少する。その後は増加に転じ，直近の２大会では全体のおよそ６割を占めている。「社会面」は，長野とソルトレークシティでは29.6％の同率で推移し，その後トリノの53.7％をピークに徐々に減少し，直近の平昌では夏季のリオと同じく６大会中一番低い割合である27.0％にまで下がっている。

藤田（2013）は，長野（1998）以前のパラリンピック関連の記事は，選手のこれまでの道のりや障がいにまつわるストーリーなどが中心になる社会面に掲載されることが多かったが，シドニー（2000）以降は，パラリンピック関連の新聞記事がスポーツ面に掲載される割合が増加し，パラスポーツがスポーツとして認識される傾向が強まったと指摘した[15]。

本調査結果から，掲載面におけるパラスポーツをスポーツとして認識する傾向の変容をみてみる。その指標となる「スポーツ面」の割合が，夏季は近年減少しているが，その背景にはメダル獲得などをはじめとした選手の成績やパラスポーツの卓越性を伝えることが多い「一面」や「特集面」の増加がある。北京では「一面」は7.9％，「特集面」は4.3％だったところ，リオではそれぞれ18.9％と14.9％にまで上がっている。そこで，「一面」「スポーツ面」「特集面」を，社会面に対し競技性を重視する報道と位置づけ，その割合を合わせた上で「社会面」の割合と比較してみよう（図４　赤字で示した割合）。夏季はシドニー以降，「一面」「スポーツ面」「特集面」を合わせた割合は，ロンドンを除き73％前後で，「社会面」は24％から27％の間で推移している。つまり，シドニーで「スポーツ面」が急増して以降は，「一面」「スポーツ面」「特集面」はその構成比を変化させながらも合計で約７割の水準を保もち，「社会面」も同様に２割台後半の水準で大きな変化はしていない。そのため，割合だけに着目すると，シドニー以降はパラスポーツをスポーツとして認識する傾向の強まりはほぼみられなかったということにな

る。ただし，「一面」「スポーツ面」「特集面」を合わせた掲載数は，シドニーでは91件だったところ，直近のリオではその倍以上の201件になっている。そのことを考慮すれば，パラスポーツの競技性を重視する記事を目にする機会は近年では確実に増えていると言える。一方，冬季に関しては，「スポーツ面」「一面」「特集面」を合わせた割合は，長野では67.2％あったが，８年後のトリノでは44.4％にまで減少している。その後，三つの紙面を合わせた割合は大会を重ねるごとに再び増加し，直近の平昌では長野と同水準の69.1％にまで戻る。「社会面」は，長野とソルトレークシティでそれぞれ29.6％あった割合がトリノで53.7％へと倍増して以降，大会ごとに徐々に減少している。長野と平昌の三つの紙面を合わせた割合を比べると過去の水準に戻っただけのように映るが，件数をみると，長野では84件だった三つの紙面を合わせた掲載数は，平昌では123件になっている。一方の社会面は長野が37件，平昌は48件である。このことから，冬季も夏季と同様に，「スポーツ面」「一面」「特集面」を合わせた掲載数は近年大きく増加していることがわかる。以上を総合すると，夏季・冬季共にパラスポーツをスポーツとして認識する傾向の強まりを一定程度確認できたと言えるだろう。

なお，夏季の「一面」は，前述の通り，最低値の5.9％を示したアテネ以降は直近のリオの18.9％まで一貫して増加している。その一方，金メダルの獲得数はアテネ17個，北京５個，ロンドン５個，リオでは０個と「一面」の掲載率の変化とは反比例している。そのため，「一面」の掲載率の増加には，とりわけ近年においては金メダル獲得以外の要因も影響を与えていると考えられる。

⑤　性別

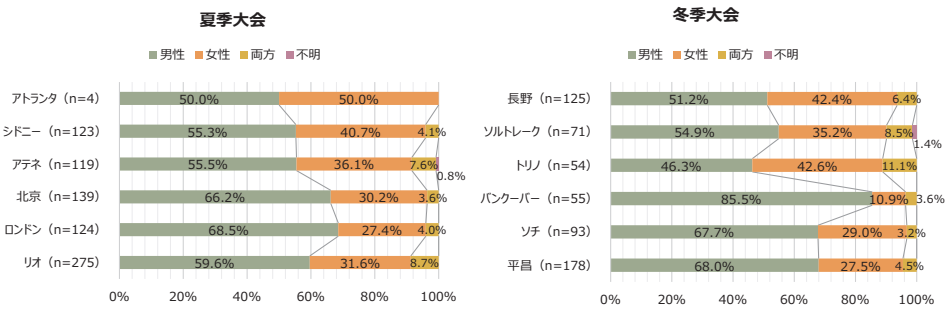

図５　性別

性別については，夏季のアトランタを除き，夏季・冬季すべての大会で男性選手の割合の方が女性選手より高い。夏季では，アトランタからアテネまで男性選手の割合がおよそ５割から６割近い水準で推移した後，アテネ以降ロンドンまで一貫して男性選手の割合が増加し，ロンドンでは最高値の68.5％に達する。その後，直近のリオでは減少に

転じ59.6％になる。一方，女性選手はアトランタの50.0％からロンドンの27.4％まで大会ごとに徐々にその割合を減少させたが，リオでは再び31.6％に増加している。

冬季では長野からトリノまでの男性選手の割合はおよそ５割で推移し，男女間の差は1.6倍以内に収まっている。しかし，その後，男性選手の割合はバンクーバーで，最高値の85.5％となり，直近の２大会であるソチと平昌は約68％の割合で推移しているため，バンクーバー以降は最低で2.3倍，最高で7.8倍もの差で男性選手の方が被写体となっている。結果として，男女間の格差は，直近の夏季・冬季各３大会においては，それ以前の各３大会よりも広がっていることがわかった。

それでは，性別に関し先行研究ではどのような傾向がみられたのだろうか。藤田（2002）において分析された男女別掲載率は，男性選手が53.2％，女性選手が40.6％で男性選手の掲載率の方が高かった[16]。調査対象とした４大会を合わせた日本人女性選手の参加率（25.1％）を踏まえると，女性選手が紙面に登場した割合は相対的に高かったと言える。Schantz & Gilbert（2001）は，女性選手の掲載率（20％）は男性選手（60％）の三分の一に過ぎず，女性選手の大会参加率（37％）と比べても低い割合だったと報告した[17]。Buysse & Borcherding（2010）は，女性選手の掲載率（41.0％）はその参加率（39％）に比例しているが，競技中の写真においては，女性選手の割合は32％に過ぎず，参加率に比例していないとした[18]。Pappous et al.（2011）は，掲載率（「男性選手（70％）」「女性選手（30％）」）にある男女間の格差は，参加率（「男性選手（72％）」「女性選手（28％）」）を反映していると分析した[19]。一方，Hilgemberg（2016）は，女性選手の掲載率は12.8％であり，男性選手の87.2％に比べ著しく低い割合であったが，その背景にはブラジルの女性選手のメダル獲得率（25％）の低さが影響している可能性があると示唆した[20]。

以上，海外の先行研究では男女間の掲載率の格差の要因として，女性選手の参加率やメダル獲得率の低さが挙げられていることがわかった。この結果を援用すれば，参加率とメダル獲得率の数値が高いほど，そこに相乗効果が生まれ掲載率も高くなると考えられる。では，本調査においても，その傾向がみられるのだろうか。まずは，夏季・冬季を合わせた全12大会別に男性選手と女性選手それぞれの掲載率・参加率・メダル獲得率の値を示す（表４）。次にそれを，「①掲載率」と「②メダル獲得率と参加率の合計値」別に数値が高い順に整理する（表５）。その結果，男女共に①と②の順位には同じ傾向がみられた。つまり，性別にかかわらず，参加率とメダル獲得率を合わせた数値が高ければ，それに呼応して掲載率も高くなるという傾向だ。

表４　日本人選手の男女別写真付き記事の掲載率（朝日新聞・読売新聞）・参加率・メダル獲得率

夏季大会	掲載率 / 参加率 / 獲得率	男性	女性
アトランタ	掲載率（n ＝ 4）	50.0%	50.0%
	参加率（n ＝81）	71.6%	28.4%
	獲得率（n ＝37）	59.5%	40.5%
シドニー	掲載率（n ＝66）	56.1%	43.9%
	参加率（n ＝151）	73.5%	26.5%
	獲得率（n ＝41）	48.8%	51.2%
アテネ	掲載率（n ＝74）	58.1%	41.9%
	参加率（n ＝160）	66.3%	33.8%
	獲得率（n ＝52）	59.6%	40.4%
北京	掲載率（n ＝94）	75.5%	24.5%
	参加率（n ＝161）	60.2%	39.8%
	獲得率（n ＝27）	85.2%	14.8%
ロンドン	掲載率（n ＝80）	70.0%	30.0%
	参加率（n ＝134）	66.4%	33.6%
	獲得率（n ＝16）	87.5%	12.5%
リオ	掲載率（n ＝191）	62.3%	37.7%
	参加率（n ＝132）	65.2%	34.8%
	獲得率（n ＝23）*	78.3%	21.7%

冬季大会	掲載率 / 参加率 / 獲得率	男性	女性
長野	掲載率（n ＝77）	50.6%	49.4%
	参加率（n ＝67）	79.1%	20.9%
	獲得率（n ＝41）	46.3%	53.7%
ソルトレーク	掲載率（n ＝38）	63.2%	36.8%
	参加率（n ＝36）	83.3%	16.7%
	獲得率（n ＝ 3）	33.3%	66.7%
トリノ	掲載率（n ＝37）	45.9%	54.1%
	参加率（n ＝40）	82.5%	17.5%
	獲得率（n ＝ 9）	22.2%	77.8%
バンクーバー	掲載率（n ＝46）	87.0%	13.0%
	参加率（n ＝41）	80.5%	19.5%
	獲得率（n ＝11）	72.7%	27.3%
ソチ	掲載率（n ＝72）	76.4%	23.6%
	参加率（n ＝20）	70.0%	30.0%
	獲得率（n ＝ 6）	100.0%	0.0%
平昌	掲載率（n ＝128）	70.3%	29.7%
	参加率（n ＝38）	86.8%	13.2%
	獲得率（n ＝10）	50.0%	50.0%

IPC Historical Results Archive, “Paralympic Games,” https://db. ipc-services.org/sdms/hira,（5 October, 2020）のデータを基に筆者作成.
*男性選手３人・女性選手１人がチームとなり参加したボッチャ混合団体の銀メダルは含まない.

表５　①掲載率と②参加率・メダル獲得率の合計値の順位表（男女別）

男性選手

①掲載率			②参加率・獲得率 合計値		
1	バンクーバー	87.0%	1	ソチ	170.0%
2	ソチ	76.4%	2	ロンドン	153.9%
3	北京	75.5%	3	バンクーバー	153.2%
4	平昌	70.3%	4	北京	145.4%
5	ロンドン	70.0%	5	リオ	143.5%
6	ソルトレーク	63.2%	6	平昌	136.8%
7	リオ	62.3%	7	アトランタ	131.1%
8	アテネ	58.1%	8	アテネ	125.9%
9	シドニー	56.1%	9	長野	125.4%
10	長野	50.6%	10	シドニー	122.3%
11	アトランタ	50.0%	11	ソルトレーク	116.6%
12	トリノ	45.9%	12	トリノ	104.7%

女性選手

①掲載率			②参加率・獲得率 合計値		
1	トリノ	54.1%	1	トリノ	95.3%
2	アトランタ	50.0%	2	ソルトレーク	83.4%
3	長野	49.4%	3	シドニー	77.7%
4	シドニー	43.9%	4	長野	74.6%
5	アテネ	41.9%	5	アテネ	74.2%
6	リオ	37.7%	6	アトランタ	68.9%
7	ソルトレーク	36.8%	7	平昌	63.2%
8	ロンドン	30.0%	8	リオ	56.5%
9	平昌	29.7%	9	北京	54.6%
10	北京	24.5%	10	バンクーバー	46.8%
11	ソチ	23.6%	11	ロンドン	46.1%
12	バンクーバー	13.0%	12	ソチ	30.0%

IPC Historical Results Archive, “Paralympic Games,” https://db.ipc-services.org/sdms/hira,（5 October, 2020）のデータを基に筆者作成.

では，次に男女別の掲載率の高い５大会に着目し，それぞれの大会で参加率とメダル獲得率のどちらの値の方が高いのかを調べる（表６）。

表６　掲載率上位５位の大会（男女別）

順位	男性選手 上位５大会		高い率（太字）	順位	女性選手 上位５大会		高い率（太字）
1	バンクーバー	参加率	**80.5%**	1	トリノ	参加率	17.5%
		獲得率	72.7%			獲得率	**77.8%**
2	ソチ	参加率	70.0%	2	アトランタ	参加率	28.4%
		獲得率	**100.0%**			獲得率	**40.5%**
3	北京	参加率	60.2%	3	長野	参加率	20.9%
		獲得率	**85.2%**			獲得率	**53.7%**
4	平昌	参加率	**86.8%**	4	シドニー	参加率	26.5%
		獲得率	50.0%			獲得率	**51.2%**
5	ロンドン	参加率	66.4%	5	アテネ	参加率	33.8%
		獲得率	**87.5%**			獲得率	**40.4%**

IPC Historical Results Archive, “Paralympic Games,” https://db.ipc-services.org/sdms/hira,（5 October, 2020）のデータを基に筆者作成.

表６をみると，男性選手の掲載率が高い５大会のうち，参加率の値がメダル獲得率より高い大会が２大会（バンクーバー・平昌），メダル獲得率の値の方が高い大会が３大会（ソチ・北京・ロンドン）あった。その一方，女性選手の掲載率が高い５大会においては，いずれの大会でもメダル獲得率の方が参加率より高い結果となった。つまりは，男性選手の場合は，参加率，メダル獲得率のどちらがより掲載率を高くする要因となっているかを判断することは難しいが，女性選手の場合は，メダル獲得率が参加率を上回ることで掲載率が高くなる傾向がみられるということである。以上のことから，本調査期間のように，男性選手の参加率が平均して常に６割以上，女性選手は４割を切る状態の場合は，女性選手の掲載率向上には，男性選手以上に，メダル獲得率が重要な役割を果たす可能性が窺える結果となった。

⑥　国籍

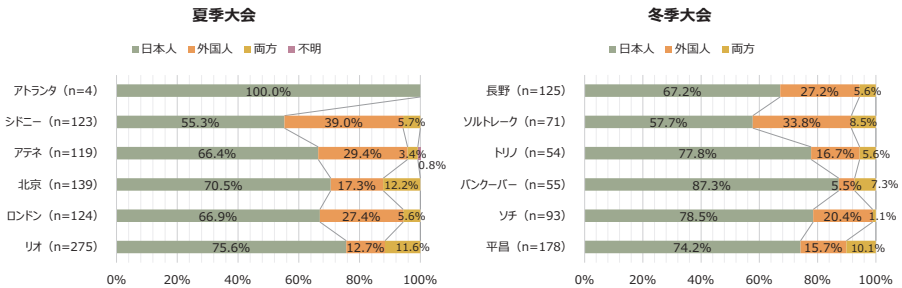

図６　国籍

国籍については，夏季・冬季すべての大会において外国人選手よりも日本人選手の掲載率の方が高く，その割合は常におよそ６割以上を占めている。夏季における日本人選手の掲載率は，シドニーの55.3％以降は増加傾向にあり，リオではアトランタを除く５大会中最も高い割合である75.6％になる。冬季は，日本人選手の割合が長野の67.2％からソルトレークシティでは57.7％と減少し，その後トリノで77.8％と増加し，バンクーバーで最高値の87.3％に達した後は再び減少に転じている。直近の平昌の日本人の割合は74.2％でリオとほぼ同水準である。なお，外国人選手の掲載率は，夏季・冬季を含めトリノ（2006）以前の大会の方が高い傾向にある。

⑦　競技

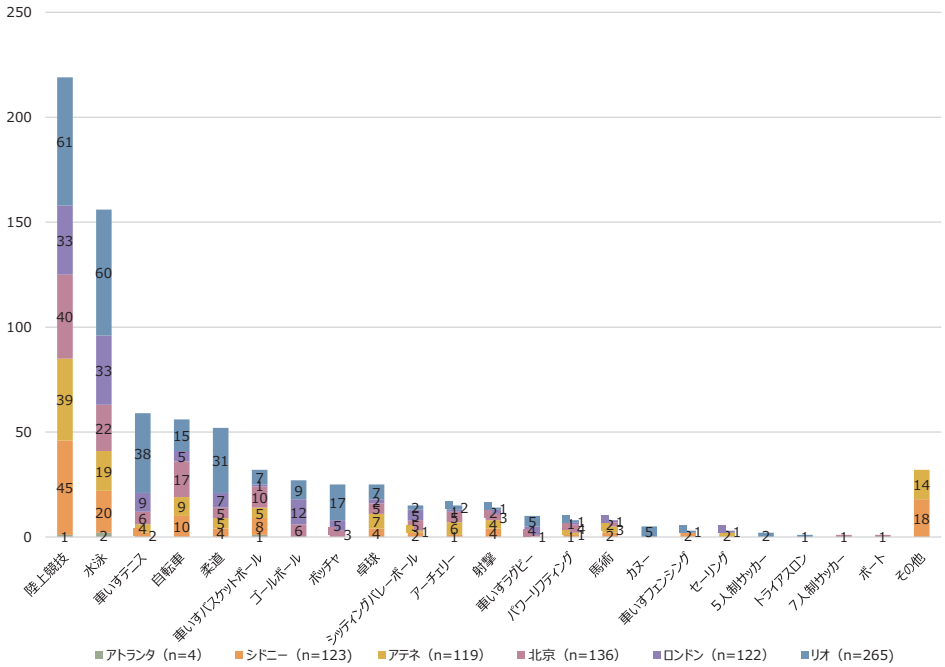

図７　競技（夏季大会）

夏季６大会で掲載された競技のうち，「陸上競技（219件）」と「水泳（156件）」が上位を占めているが，これはBuysse ＆ Borcherding（2010）による調査においても「陸上競技」と「水泳」が上位２競技であったのと同じ結果である[21]。全６大会合わせて22の競技が確認できた。大会競技ではあるが写真掲載がなかったのは，ローンボール（アトランタ）と知的障がい者バスケットボール（シドニー）である。

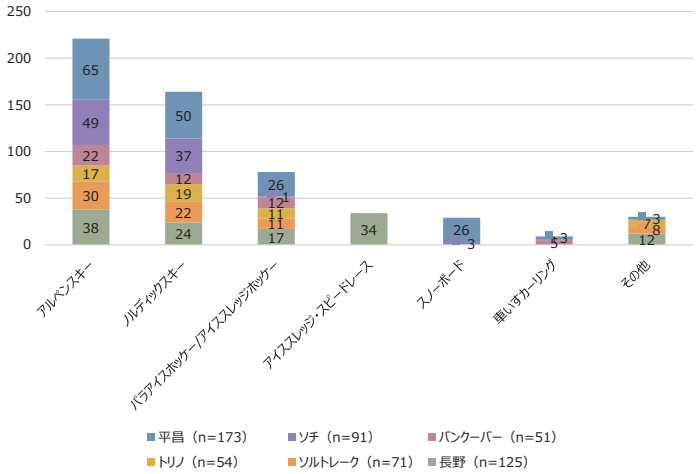

図８　競技（冬季大会）

冬季では，「アルペンスキー（221件）」，次いで「ノルディックスキー（164件）」が上位を占める（本来，「クロスカントリースキー」「バイアスロン」は別競技であるが，藤田の調査（2002）時に両競技を「ノルディックスキー」とまとめてデータ入力をしていたため，同じ規則に従い冬季全６大会のデータ入力を行った）。冬季は夏季に比べて競技数が少ないため，全６大会を通して実施された全競技の写真が確認できた。長野で34件の掲載があった「アイススレッジ・スピードレース」の写真掲載がその後確認できなかったのは，長野以降，同競技がパラリンピックの正式競技ではなくなったためである。スノーボードは，2014年のソチで，アルペンスキーの１種目「スノーボードクロス」として導入され，2018年の平昌で正式競技となっている。

競技間にある掲載数の差はどこから来ているのだろうか。直近のリオを例に取ると，まず，日本選手団132人のうち，その４割強が陸上競技（36人）と水泳（19人）の選手であった。次に，日本選手団のメダル全24個のうち，14個が両競技の選手によって獲得されている。そのため，競技別選手数，メダル獲得数が掲載数と比例している可能性が示唆される。

次に冬季については，直近の平昌を例に取り，日本人選手団（38人）の内訳をみてみる。掲載率の高かったアルペンスキー（９人）とノルディックスキー（９人）の選手数は計18人で，日本選手団の全体のおよそ５割を占めている。日本選手団が獲得したメダル10個のうち，この２競技の選手が８個を獲得しており，ここでも競技別の選手数，メダル獲得数との掲載数の相関関係が窺える。

なお，このように陸上競技，水泳，アルペンスキー，ノルディックスキーの選手が多いのには，もともとそれら競技の種目数が多いことがその背景にある。リオを例に取る

と，全528種目中，陸上競技（177種目）と水泳（152種目）が全体の６割以上を占めている。平昌をみると，アルペンスキー（30種目）とノルディックスキー（38種目）は全80種目の８割以上を占めている[22]。つまり，それだけ参加できる選手枠が大きいのである。

上で挙げた四つの競技以外でも，ゴールボールやボッチャの掲載件数の増加からもメダル獲得との関連性がみえる。ゴールボールは，北京の６件からロンドンで12件に倍増しているが，その背景には，北京ではメダル獲得にいたらなかったゴールボール女子日本代表が，次大会のロンドンでは金メダルを獲得したことがあるだろう。ボッチャ日本代表もロンドンではメダルが獲得できなかったが，リオでは混合団体で銀メダルを獲得しており，その結果，掲載数もロンドンの５件からリオの17件へと増加している。

⑧　場面

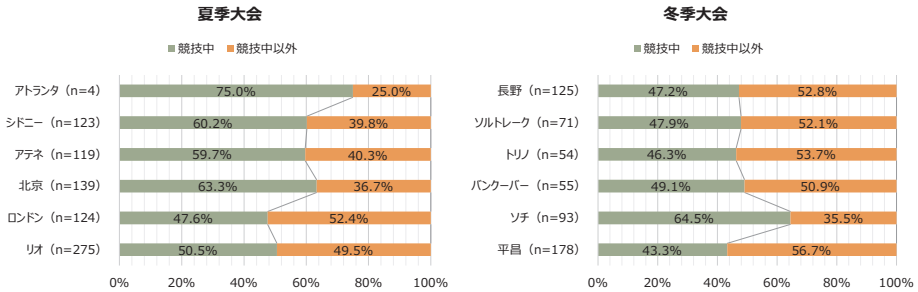

図９　場面

場面をみると，夏季のうち「競技中」が「競技中以外（開閉会式・表彰式・試合直後など）」の割合を上回っているのは，ロンドン以外の５大会である。「競技中」と「競技中以外」の比率の変化をみると，シドニー・アテネ・北京の３大会はおよそ６対４の割合であり，直近の２大会であるロンドンとリオはおよそ５対５で推移している。

冬季では，「競技中」が「競技中以外」を上回ったのは１大会（ソチ）のみで，長野からバンクーバーまでの４大会は，「競技中」と「競技中以外」の割合が1.8から7.4ポイント差の範囲内でおよそ５対５で推移している。その後ソチでは，「競技中」の割合が６割以上となり，平昌では二つの割合が再び半々に近づいている。

場面の掲載数の合計を夏季・冬季別に比較すると，夏季は「競技中（434件）」「競技中以外（350件）」で，冬季は「競技中（282件）」「競技中以外（294件）」であり，冬季は夏季に比べ「競技中」と「競技中以外」の値が均衡している。以上を踏まえると，夏季は冬季に比べ「競技中」の方が掲載される傾向があり，冬季は「競技中」と「競技中以外」のどちらの方がより掲載されるかには大きな差がないことが読み取れる。

近年では，夏季のリオとロンドンで「競技中」と「競技中以外」の割合がほぼ５対５になっていること，冬季の平昌においては，「競技中以外」の割合がソチの35.5％から平昌の56.7％へと大きく増加していることなどから，「競技中以外」の割合の増加が目立つ。その増加の背景にはどのような要因があるのだろうか。「競技中以外」の写真には，大きく分けて「試合直後」「表彰式」「開閉会式」がある。まずは夏季に着目するが，競技数が多いため，掲載数が全体のほぼ半数を占めている陸上競技と水泳に絞り，直近の夏季３大会を例に取り「競技中以外」の詳細をみてみる（図10）。

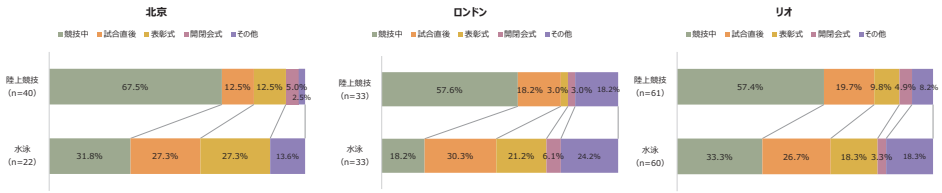

図10　近年の夏季３大会の場面（陸上競技・水泳）

図10によると，３大会すべてにおいて「競技中以外」に含まれる「試合直後」「表彰式」の割合は，陸上競技よりも水泳の方が高い。逆に，陸上競技は水泳に比べ「競技中」の割合が明らかに高くなっている。この両競技の場面における内訳の差はどこから来ているのだろうか。要因のひとつとしては，競技中の競泳選手を被写体とすることの難しさが考えられる。競技中に全身を写すことのできる陸上競技に比べ，水泳では選手の体のほとんどは水に浸かっており全身を撮影することはおろか，構図によってはその選手が誰なのかさえ判別できない写真になってしまう。そうした困難を避けるため，ゴール直後の選手の表情を伝える写真や表彰式の写真が選択されている可能性が考えられる。こうした水泳の「競技中以外」の写真は，ロンドンでは全体の21.8％，リオでは14.5％を占めており，「競技中以外」の割合がロンドン以降高くなった要因のひとつであると考えられる。

次に，全競技を含めた「競技中以外」の内訳を直近の冬季３大会を加えみてみる（図11）。夏季のロンドンとリオにおいては，「試合直後」の割合が２割近くを占めているが，これは先の陸上競技と水泳の影響であろう。冬季の「試合直後」の割合は，ソチでは2.2％だったものが，直近の平昌では23.0％になっており，ソチから平昌にかけて「競技中以外」の割合が大きく増加している要因がここにあることが明らかになった。

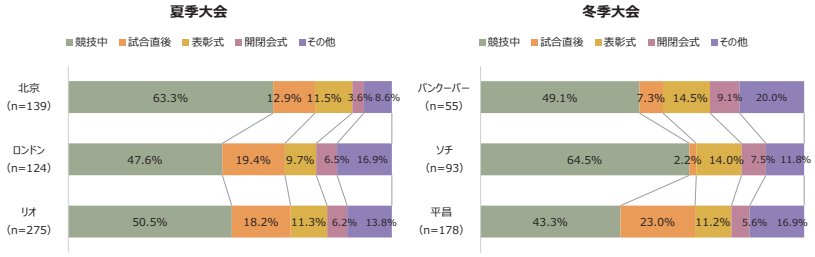

図11　近年の夏季３大会・冬季３大会の場面の内訳

「競技中以外」の割合の増加からは，競技性を重視しない写真の増加が連想される。しかしながら，近年の「競技中以外」の増加には「試合直後」の割合の増加が関連している。「試合直後」には，試合結果を喜びガッツポーズする写真が多く含まれるが，これらは「競技中」ではないものの，ある種の躍動感に満ちており，競技性を重視する写真のひとつであるという見方もできるだろう。そのため，とりわけ夏季については「競技中」の割合は減ったものの，近年も競技性を重視する報道が続いていると考えられる。

⑨　表情

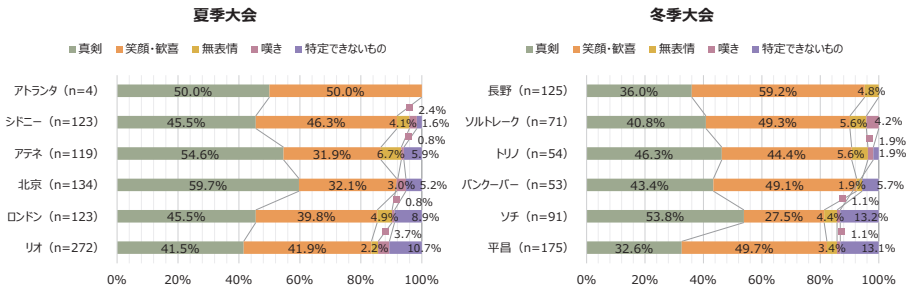

図12　表情

表情については夏季・冬季のすべての大会において，「真剣」と「笑顔・歓喜」が８割以上を占める。そのことから，メダルを逃して悔しがる表情のような「嘆き」の写真よりは，「真剣」が多くを占める競技中や勝利を喜ぶ写真が選ばれ掲載されていることが窺える。夏季はシドニーの45.5％から増加を続けていた「真剣」の割合が，北京で最高値の59.7％となって以降減少に転じており，「笑顔・歓喜」はそれに反比例した傾向をみせている。直近のリオでは「真剣」と「笑顔・歓喜」はどちらもおよそ42％とほぼ同率である。

冬季は，長野からトリノにかけて「真剣」が36.0％から46.3％へと増加し，「笑顔・歓喜」は59.2％から44.4％へと減少する。バンクーバー以降平昌まで「真剣」「笑顔・歓喜」

の割合は特定の傾向を持たず増減している。直近の平昌では,「真剣」は32.6%,「笑顔・歓喜」は49.7%である。

⑩　障がい表象の有無

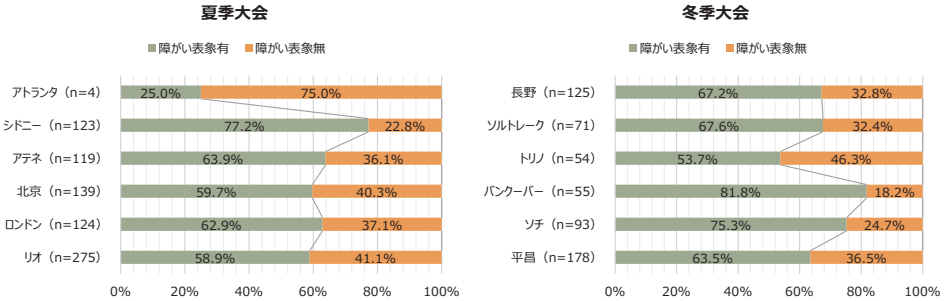

図13　障がい表象の有無

障がい表象の有無については，夏季のアトランタを除き，夏季・冬季すべての大会を通して,「障がい表象有」で掲載される割合の方が高く，その多くが６割以上である。夏季のアトランタでは「障がい表象有」と「障がい表象無」の割合がおよそ２対８であったが，シドニーではそれが８対２に反転する。その後，アテネ以降は,「障がい表象有」と「障がい表象無」の割合はおよそ６対４で推移している。

冬季では長野からソルトレークシティではその比がおよそ７対３で推移し，トリノでは両者の割合が６大会中一番近い比率となっている。その後，バンクーバーで「障がい表象有」の割合は81.8%と最高値を示して以降減少に転じ，直近の平昌では「障がい表象有」が63.5%,「障がい表象無」が36.5%となっている。

夏季のアトランタを除いたすべての大会で,「障がい表象有」は「障がい表象無」の割合よりも高いという結果が示されたが,「障がい表象無」の割合も全12大会中八つの大会で，３割から４割の間で推移している。夏季における「障がい表象無」の写真の中には，近年写真の掲載数が増加している視覚障がい者柔道が含まれる。同じく視覚障がい者競技であるゴールボールではアイシェードを装着するが，視覚障がい者柔道ではアイシェードなどの用具を装着しない。従って，写真に選手の障がい部位である眼が写っていても,「障がい表象有」との判断が難しい場合は，主に「障がい表象無」に分類される。また，冬季をみると，平昌のスノーボードで金メダルを獲得した成田緑夢のようなケースは，左足の膝から下がほとんど動かないものの，義足を装着していないため写真上では障がい表象を確認することはできない。さらに，冬季の場合は，義足を装着している場合でも，ウェアに隠れて見えないこともある。こうした例は夏季・冬季ともに大会ごとに一定数存在し，特に平昌の成田のようにそうした選手が活躍をした場合,「障

がい表象無」の割合が増加する可能性がある。

⑪　障がい表象の種類

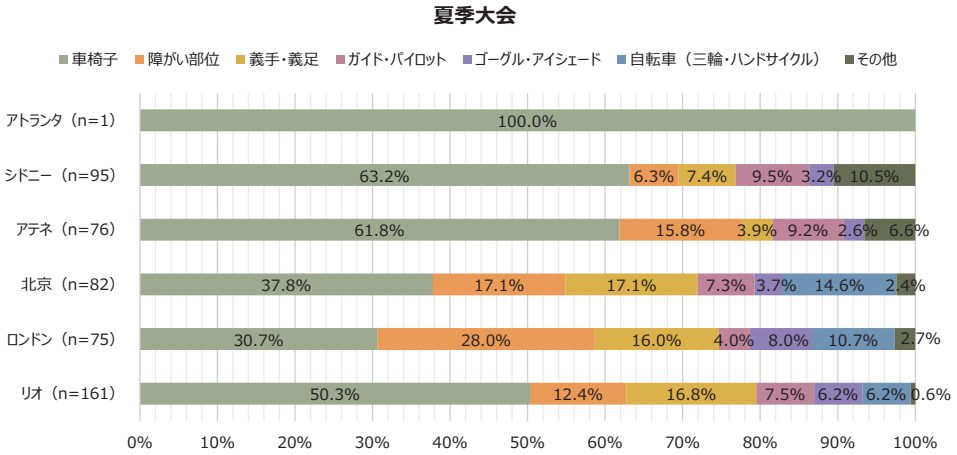

図14　障がい表象の種類（夏季大会）

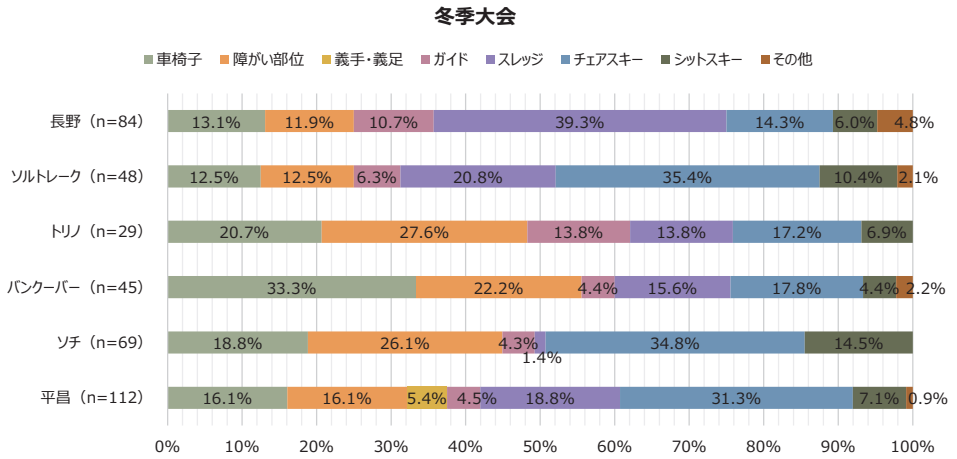

図15　障がい表象の種類（冬季大会）

障がい表象の種類について，夏季は６大会すべてにおいて「車椅子」の割合が一番高い。一方，車椅子競技の少ない冬季においてはバンクーバーは「車椅子」の割合が一番高いものの，ソルトレークシティ・ソチ・平昌ではアルペンスキーで使用される「チェアスキー」の割合が一番高くなっている。Schantz ＆ Gilbert（2001）も，障がい表象の割合では「車椅子（52%）」が一番高く，次いで「切断（16%）」「隠されている（32%）」であったと報告した[23]。Buysse ＆ Borcherding（2010）も障がい表象のうち，一番割合

が高かったのは「車椅子（46%）」であったと結論づけた[24]。Brittain（2016）は，このように車椅子アスリートが集中的に取り上げられることで，車椅子を利用しない障がい種の選手が注目を浴びる機会が少なくなると指摘した[25]。

以上，単純集計結果を分析してきた。次章ではこれらの分析結果を踏まえ，第Ⅰ章で触れた藤田（2002）が鳴らす警鐘，すなわち，パラリンピック新聞写真による健常者スポーツの支配的価値である「より速く，より高く，より強く」という基準を満たさない者を排除する傾向の強化が，現段階においても生じているのかを考察する[26]。

Ⅳ．考察

IPC が，『2015年～2018年の戦略計画』で掲げたビジョンは，「パラアスリートが，スポーツにおける卓越した能力を発揮し，世界に刺激を与え興奮させることができるようにすること」であった[27]。このビジョンからは選手が卓越性を発揮することに重きが置かれていることがわかる。藤田（2002）はこうしたパラリンピックにおける卓越性の追求がもたらすものとして，健常者スポーツの支配的価値である「より速く，より高く，より強く」という基準を満たさない者を排除する危険性について指摘し，パラリンピック新聞写真がそれを強化しているとした。

上述の内容について本研究では現段階での状況を確認した。夏季の「義手・義足」の表象は，シドニー時の7.4%と比べリオでは16.8%にまで増加している。ブレードを装着した選手が走行や跳躍する姿は，もはや「がんばる身体障害者」像を超えた「サイボーグ」や「超人」すら連想させる。このようなアスリートの「卓越性」が感じられる写真の掲載は増えており，それにより一般の障がい者へのエンパワーメントが進んでいる面もあるだろう。その一方，こうした新聞写真の増加により藤田が指摘する傾向がさらに強まっているとも考えられる。それはまた，熊谷（2018）の報告にあるように，頑張る障がい者がいる一方，彼らと自らを比較し自分は無能力であると考える一般の障がい者を増やし，障がい者間における能力主義的な格差を助長している可能性へと繋がるのではないだろうか[28]。こうしたパラリンピック報道の難しさは，パラリンピック自体が孕む競技性と公共性という矛盾を反映している。実際，IPC は，アスリートの卓越性をアピールすることで世界をインスパイアし，社会の変革を促すことをビジョンとして掲げ，オリンピックに負けないような競技性を発揮することを目標としてきた。しかし，その IPC が2019年に，「パラスポーツを通して共生社会を創る」という新たなビジョンを打ち出し[29]，17ある SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）

中の11の目標に関してはパラリンピック・ムーブメントが貢献できるとし，SDGs の協定にも署名をしたことは注目に値する[30]。このように IPC は，パラリンピックの社会的意義をより明確にするために，自らが掲げるビジョンの中に共生社会実現を盛り込み，その目標達成に向け新たな一歩を踏み出したのである。こうした IPC の動きも相まって，報道においてもより一層パラリンピックの社会的意義を意識した傾向が加速すると考えられる。しかしながら，そもそも競技性が重視されるスポーツ報道において，競技の卓越性が持つ魅力を余すことなく伝えるとともに，一般の障がい者が疎外感を感じることのないようにパラリンピックを報道することは決して容易なことではない。IPC 自体が競技性と公共性のバランスを模索する中，報道現場においても同様の模索が続くことは自明であり，競技性と公共性のバランスがとれた報道とは一体どのようなものなのかは，パラリンピック報道においては容易に答えのでない課題として存在し続けるだろう。

Ⅴ．本調査のまとめ

① 写真掲載数

夏季・冬季別の写真掲載数の合計は，夏季884件，冬季690件と夏季の方が多い。夏季は，アトランタ時は掲載数が５件と著しく少なかったが，次大会であるシドニーでは130件まで急増する。その後，アテネ122件，北京156件，ロンドン150件と大会ごとに増減が繰り返され，リオでは前大会であるロンドンの150件の２倍以上に当たる321件にまで跳ね上がる。冬季は，自国開催の長野では136件あったが，次の大会のソルトレークシティでは74件とほぼ半減し，トリノ60件，バンクーバー63件と数を減らす。しかしながら，ソチでは長野までとはいかないものの113件まで増加し，平昌ではその倍以上の244件となる。結果として，写真の掲載数の増減には自国開催という要因が大きな影響を与えていることが明らかになった。

② 被写体

夏季・冬季ほぼすべての大会で，被写体が「選手」である写真の割合が80％を超えていたが，近年では，アスリートを取り巻く人々や環境を被写体とした「選手以外」の写真の掲載率が増加している。

③ 朝刊・夕刊

冬季のソルトレークシティとバンクーバーを除く夏季・冬季すべての大会で，朝刊での掲載率が50％を超えており，夕刊より朝刊に掲載される写真の割合の方が高い。

④　掲載面

パラアスリートの写真は，夏季・冬季共に「スポーツ面」もしくは「社会面」に主に掲載されている。夏季では，北京以降「スポーツ面」での掲載が減少した一方，「一面」と「特集面」が増加した。冬季では，６大会中最低の割合を示したトリノ以降，「スポーツ面」での掲載は増加を続け，「社会面」は減少傾向にある。

⑤　性別

夏季のアトランタを除く夏季・冬季すべての大会で，男性選手の写真の割合の方が女性選手より高い。

⑥　国籍

夏季・冬季のすべての大会において外国人選手よりも日本人選手の写真が掲載される率が高い。

⑦　競技

掲載数の多い上位二つの競技は，夏季では「陸上競技（219件）」「水泳（156件）」，冬季は「アルペンスキー（221件）」「ノルディックスキー（164件）」である。

⑧　場面

明らかな傾向とまでは言えないが，夏季では冬季に比べ「競技中」の方が掲載される傾向があり，冬季は「競技中」と「競技中以外」のどちらの方がより掲載されるかには大きな差がない。

⑨　表情

夏季・冬季のすべての大会において，選手の表情は「真剣」と「笑顔・歓喜」が８割以上を占める。

⑩　障がい表象の有無

アトランタを除く夏季・冬季すべての大会で，「障がい表象無」よりも「障がい表象有」で掲載される割合の方が高い。

⑪　障がい表象の種類

夏季は，６大会すべてにおいて「車椅子」の割合が一番高い。一方，冬季で「車椅子」の割合が一番高いのは１大会のみで，３大会において「チェアスキー」の割合が一番高い。

おわりに

今回の調査で対象となった朝日新聞と読売新聞においては，特に2013年の東京大会開催決定以降，新聞記事数だけではなく写真の掲載数の増加も明らかとなった。また，掲

載数に差はあるもののほぼすべての競技の写真が取り上げられていた。さらに，読者のパラリンピックに関する理解を深めるために，写真やイラストを用いて競技の説明をする記事も大会ごとに増加傾向にあり，パラリンピックの報道内容は深まっていると考えられる。Brittain（2016）は，競技性の高いスポーツへの参加を目指す障がい者にとって，そのロールモデルとなるパラアスリートの写真を印刷媒体上で目にすることの重要性を説いているが[31]，日本国内においてはパラアスリートの新聞写真の掲載自体は劇的に増加している。それが一過性に終わることなく，パラリンピックの報道が質，量共に担保され続けることが，今後の国内でのパラスポーツの認知度向上や振興に繋がっていくのではないだろうか。

今後は，今回の調査結果を基に，パラリンピック報道の社会的意義の変化も追っていく必要があるだろう。

注

⑴　本稿ではIPCの『Guide to Reporting on Para Athletes』（2020）に従い，パラリンピックに出場する選手をパラアスリート（Para athlete）と表記する[32]。

⑵　複数選手が写っており，かつその全員にカメラの焦点が合っている場合，⑦「競技」では，選手の競技が共通している際は該当する「競技」を選択，それ以外は分析対象外とする。⑧「場面」では，複数いる選手のひとりでも競技をしている場合は「競技中」を選択。⑨「表情」では，選手の表情が同じ場合は該当する「表情」を選択，それ以外の場合は分析対象外とする。⑩「障がい表象の有無」では，選手のうち，ひとりにでも障がい表象が確認できれば障がい表象「有」を選択。⑪「障がい表象」では，複数ある障がい表象が共通する場合は該当の障がい表象を選択，それ以外は分析対象外とする。

参考引用文献

1　山崎貴史，石井克，2019，「障害者スポーツに関する新聞報道の変容：競技間格差に着目して」，『北海道大学大学院教育学研究院紀要』，134，121.

2　遠藤華英，2017，「リオデジャネイロ・パラリンピック大会に関する新聞報道の傾向分析と一考察」，『日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要』，7，32.

3　藤田紀昭，2002，「障害者スポーツとメディア」，橋本純一編『現代メディアスポーツ論』，世界思想社，198-217.

4　同上，214.

5　Schantz, O., and Gilbert, K., 2001, “An Ideal Misconscructed: Newspaper Coverage of The Atlanta Paralympic Games in France and Germany,” Sociology of Sport Journal, 18, 69-94.

6　Buysse, J. A. M., and Borcheding, B., 2010, “Framing Gender and Disability: A Cross-Cultural Analysis of Photographs From the 2008 Paralympic Games,” International Journal of Sport

Communication, 3, 308-321.
7 DePauw, K. P., 1997, “The (In)Visibility of Disability: Cultural Contexts and ‘Sporting Bodies’,” Quest Illinois National Association for Physical Education in Higher Education, 49, 416–430.
8 Pappous, A., Marcellini, A., and de Léséleuc, E., 2011, “From Sydney to Beijing: The Evolution of the Photographic Coverage of Paralympics Games in Five European Countries,” Sport in Society, 14(3), 345-354.
9 Hilgemberg, T., 2016, “Smile for the Camera: Photographic Analysis of 2012 Paralympic Games Media Coverage in Brazilian Newspapers,” Bulletin Journal of Sport Science and Physical Education, 70, 13-21.
10 日本 ABC 協会,「新聞発行社レポート 半期　2019年１月～６月平均」, https://adv.yomiuri.co.jp/mediadata/dl.php?fn=2098_allData.pdf, (2020年７月31日).
11 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会,「株式会社読売新聞東京本社, 株式会社朝日新聞社, 株式会社日本経済新聞社及び株式会社毎日新聞社との東京2020スポンサーシップ契約について」, https://tokyo2020.org/ja/news/news-20160122-01-ja, (2021年１月29日).
12 Moscovici, S., 2011, “Representações Sociais: Investigações em Psicologia. Petrópolis,” Rio de Janeiro, Vozes.
13 新聞通信調査会, 2010,『メディア展望』, 580, 25, https://www.chosakai.gr.jp/wp/wp-content/themes/shinbun/asset/pdf/project/notification/20100500_580.pdf, (2020年８月６日).
14 広報会議,「知ってるだけで差がつく　記者との付き合い方ガイド　2014年９月号」, https://mag.sendenkaigi.com/kouhou/201409/newspaperman-real/003121.php, (2020年10月８日).
15 藤田紀昭, 2013,「障害者スポーツの地平」, 日本スポーツ社会学会編『21世紀のスポーツ社会学』, 創文企画, 126-127.
16 藤田紀昭, 前掲書, 2002, 205.
17 Schantz and Gilbert, “An Ideal Misconscructed: Newspaper Coverage of The Atlanta Paralympic Games in France and Germany,” 82.
18 Buysse and Borcheding, “Framing Gender and Disability: A Cross-Cultural Analysis of Photographs from the 2008 Paralympic Games,” 317.
19 Pappous et al.,“From Sydney to Beijing: The Evolution of the Photographic Coverage of Paralympics Games in Five European Countries,” 351.
20 Hilgemberg, “Smile for the Camera: Photographic Analysis of 2012 Paralympic Games Media Coverage in Brazilian Newspapers,” 15.
21 Buysse and Borcheding, “Framing Gender and Disability: A Cross-Cultural Analysis of Photographs from the 2008 Paralympic Games,” 314-316.
22 IPC Historical Results Archive, “Paralympic Games,” https://db. ipc-services. org/sdms/hira, (5 October, 2020).
23 Schantz and Gilbert, “An Ideal Misconscructed: Newspaper Coverage of The Atlanta Paralympic Games in France and Germany,” 82.
24 Buysse and Borcheding, “Framing Gender and Disability: A Cross-Cultural Analysis of Photographs from the 2008 Paralympic Games,” 316.
25 Brittain, I., 2016, “The Paralympic Games Explained: Second Edition (English Edition) 2nd Edition,” Routledge, https://a.co/1hCYzfR.
26 藤田紀昭, 前掲書, 2002, 214.
27 IPC, Strategic Plan 2015 to 2018, 5, https://www.paralympic.org/sites/default/files/documen

t/150619133600866_2015_06+IPC+Strategic+Plan+2015-2018_Digital.pdf, (10 April, 2020).

28 NHK,「東京パラリンピックを前に“能力主義”とどう付き合うか」, https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/108/#p-articleDetail__section--03, (2020年４月３日).

29 IPC, “The IPC Reveals New Strategic Direction,” https://www.paralympic.org/news/ipc-reveals-new-strategic-direction, (10 April, 2020) .

30 IPC, “IPC to Advance the Sustainable Development Goals,” https://www.paralympic.org/news/ipc-advance-sustainable-development-goals, (10 April, 2020).

31 Brittain, “The Paralympic Games Explained: Second Edition (English Edition) 2nd Edition,” https://a.co/diT5sfr.

32 IPC, 2020, Guide to Reporting on Para Athletes, 4, https://www.paralympic.org/sites/default/files/2020-02/2020_02_12%20Guide%20to%20reporting%20on%20Para%20athletes.pdf, (10 August, 2020).

An Analysis of the Photographic Coverage of Paralympic Games in Japan from 1996 to 2018

YAJIMA Yoshiko and FUJITA Motoaki

In the last twenty years, the situation surrounding Para sport and Para athletes in Japan has been changing. On the occasion of the 1998 Nagano Paralympic Games, Japanese media began paying attention to the Paralympics. With the Olympic and Paralympic Games expected in 2021, the Paralympics and its significance have become more prominent than ever in Japan.

In this study, the authors examine photographs in two major Japanese newspapers covering summer and winter Paralympic Games from 1996 to 2018, to determine how Para athletes have been portrayed by tracing its changes. Our results show the number of published images has significantly increased since Tokyo's successful bid for the 2020 Games in 2013. The data also reveals gender inequality in the number of times Para athletes appear in the newspapers during the period. In addition, the findings suggest that competitiveness tends to be focused on more intensively than human interest stories. Though this tendency could empower persons with disabilities, it might, on the other hand, make persons with disabilities face segregation and marginalization in society, which could be one of the biggest tasks for the media to tackle.